



## スローライフ

右肩上がりの経済成長を前提とした経済社会システムが見直しを迫られるなか、新しいライフスタイルを志向する動きが活発化しています。キーワードは、「スロー」という言葉であり、「スローライフ」と総称される生活スタイルが注目されています。これには、単なる「ゆっくり、ゆったり」という意味だけでなく、「エコロジカル（環境に配慮した、自然と共生した）」や「サステナブル（持続可能な）」といったニュアンスも込められています。

下図の通り、バブル崩壊後、経済成長率が平均1%程度の水準まで低下するという現実の中で、先行きについても、かつてのような高度成長は見込めないと予想する人々が増加するにつれ、物質的な豊かさを追求した20世紀型のライフスタイルや価値観も変化していかざるをえません。環境という切り口からみれば、大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済社会が招いた深刻な環境破壊の問題は、そうした変化によって改善される可能性を持っています。

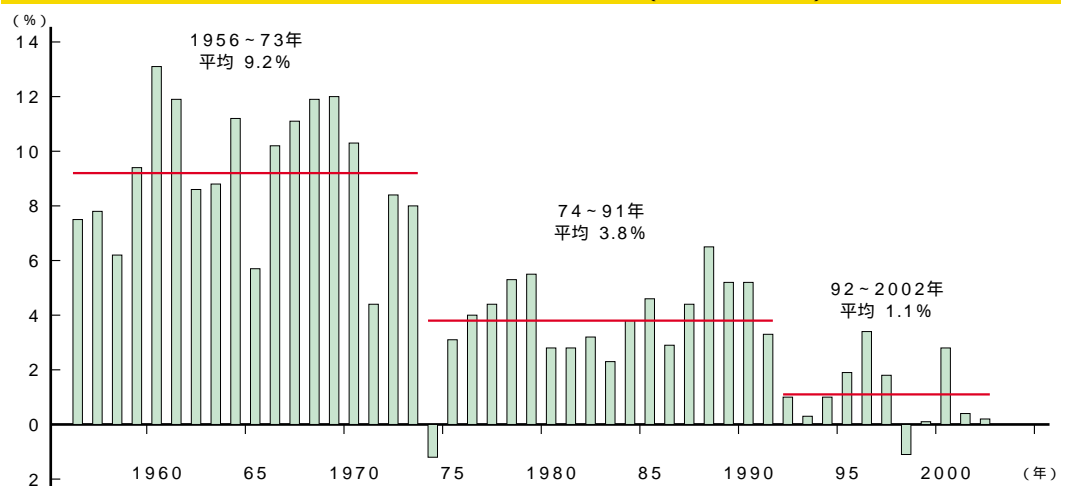
世の中に目を向けると、スローライフは様々な形で実践され、着実に浸透しつつあります。例えば、イタリアで1980年代後半に生まれた「スローフード」の考え方は、その後世界各地に広がり（注）単に食生活の分野にとどまらず、人々の暮らし方や生き方をも問い直すムーブメントへと発展しています。ここで大切なポイントは、ファストフードそのものに反対することではなく、簡単便利で効率的とはいえ、何時でも何処でも同じような味や品質のファストフードに象徴される生活、いわば「ファストライフ」に疑問を投げ掛けることです。

このように、スピードや効率性を優先する「ファスト」な生活スタイルから、ひとりひとりが、心の豊かさや自分なりの時間・空間を大切に、それを楽しむことを重視する「スロー」な生活スタイルへと、人々の価値観は多様化しつつあります。今後、こうした需要サイドの意識変化は更に進むと見込まれるだけに、供給サイドの企業には、スローライフの実現に役立つ商品やサービスを開発・提供するという視点が求められましょう。

土方 研也

（注）1986年、北イタリアのピエモンテ州のブラ（Bra）という小さな町で、スローフード協会が発足した。同協会のホームページ（<http://www.slowfood.com/>）によれば、わが国を含め、世界48カ国に合わせて約8万人の会員を持つ一大組織へと成長している。

わが国の実質GDP成長率の推移（暦年ベース）



（資料）内閣府